

日本と中国における青少年の家庭内コミュニケーション問題を視覚的に再構成する研究

視覚デザイン領域

245009

リュウイシン

Ryu isin

指導教員：吉川賢一郎

キーワード：コミュニケーション、家庭、視覚化、親子関係、日中比較

1. はじめに

家庭は、青少年にとって最も身近で基本的な生活空間であり、安心感を得ながら自己を形成していく重要な場である。本来、家庭内のコミュニケーションは、感情の共有や価値観の調整を行う基準としての機能です。しかし、現代社会では、親子間の価値観の差、学業、進路に関する圧力、生活リズムの変化、スマートフォンを中心とした情報環境の普及など複数の原因が重なり、家庭内の会話が十分に成立しにくい状況が生じている。特に青少年期は、心理的自立を志向しながらも情緒的には家族への依存を残す時期であり、親子関係が「距離を取りたい気持ち」と「理解してほしい気持ち」の間に揺れる。この揺らぎは、怒り・悲しみ・不安などの感情をそのまま言葉にすることを難しくし、結果として感情が別の形へ“変換”されて現れることがある。たとえば、話題を逸らす、冗談として包む、沈黙する、態度に出す、スマホへ逃げるなど、言語的表現ではない形で感情が表出する場面が見られる。

そこで、本研究では家庭内コミュニケーション問題を視覚デザインの領域から捉え、調査データに基づきながら問題構造を“見える形”へ翻訳し直すことを試みる。特に「言葉にならない感情」に焦点を当て、感情が抑制される過程や、別の行動へ変換される過程を、ポスター表現として再構成することを目的とする。また本研究は日本と中国の比較も含む。日本と中国は地理的・文化的に近い一方で、教育環境、家庭内の権威構造、感情表現のスタイル、親子間距離感などに違いが存在する。日中比較によって、同じ「家庭内コミュニケーションの困難」でも現れ方が異なる可能性がある。本研究はどちらかを優劣で評価するのではなく、それぞれの特徴を整理し、差異が視覚的に理解できる形として提示することを目指す。

2. 研究目的

本研究の目的は、「日本と中国における青少年の家庭内コミュニケーションの実態を調査・分析し、その問題構造を視覚デザイン、特にポスター表現によって再表現すること」である。

目的は大きく以下の2点に整理する。

- (1) 日本および中国の青少年に対する調査を通じて、家庭内コミュニケーションの現状と課題を比較的に分析する。
- (2) 得られたデータを基に、ポスターというメディアを用いて、その問題構造を視覚的に表現することである。

分析結果をポスター表現へ翻訳し、感情表現の抑制／変換の構造を視覚化する作品として提示する。成果物は、8つのテーマに分類した16枚(8グループ×日中2枚)のポスターシリーズとする。

3. 研究課題

本研究は次の問い合わせを中心に展開する。

- (1) 家庭内において青少年の「言葉にならない感情」は、どのような形で表出しているのか。
- (2) 日本と中国では、感情表現の抑制／変換のされ方にどのような差異が見られるのか。
- (3) 調査データ（設問・数値）を根拠として、ポスター表現へ変換するためのルールはどのように設計できるか。
- (4) ポスターは家庭内コミュニケーション問題を第三者へ共有する媒介として、どのような可能性を持つか。

4. 研究方法

4.1 調査概要

本研究では、青少年の家庭内コミュニケーションを把握するためにアンケート調査を実施した。調査対象は日本と中国の青少年であり、回答数は以下の通りである。

日本：177名（長岡を中心とした現場調査＋ネットアンケート形式）

中国：120名（筆者の地元・蘇州における中学生現場調査を中心）

質問内容は、家庭内での会話頻度、話題の種類、感情を共有する相手の有無、相談行動、親の反応、感情が言語化されるか否かなどで構成した。

4.2 分析の観点

収集したデータは、単純な数値比較だけでなく、感情が言葉にならない場合に「何に置き換わって表れるのか」という構造を明確にするため、以下の観点で整理・分析した。

親子の会話頻度（高い／低い）

感情表現の方法（直接言語化／回避／沈黙／態度／冗談／スマホ）

相談行動の有無（相談する／相談できない）

親の関わり方・反応（理解・共感／否定・圧力／無関心）

日中差異が大きい項目の抽出とテーマ化

親とのコミュニケーション方法は？（複数選択可）

	日	中
口頭でのコミュニケーション	88.70%	91.40%
書面でのコミュニケーション	52%	47.10%
非言語コミュニケーション	26%	13.30%

親とのコミュニケーションで通常直面する問題はどのようなものですか？（複数選択可）

	日	中
コミュニケーションがうまくいかない	41.20%	61.40%
親が自分を理解してくれない	25.40%	53.30%
共通の話題がない	23.20%	39.5%
親が過度に批判や非難をする	15.30%	30.5%
その他	13.60%	8.1%

毎週、親との交流の話題の頻度はどのくらいですか？		%
	日	中
毎日	75.70%	75.20%
5回以上	9%	10.90%
3～5回	6.20%	7.10%
3回以降	5.10%	5.70%
ない	4%	1%

家で親と話すトピックはどのようなものがありますか？（複数選択可）

	日	中
学業の状況	29.90%	80.50%
趣味・関心（ゲーム、スポーツなど）	23.20%	53.80%
対人関係	16.40%	68%
個人的な感情（感情、ストレス、困惑など）	12.40%	57.60%
将来の計画（進学、旅行、ショッピングなど）	10.20%	57.10%
社会のホットトピック	7.90%	48.60%

5. 8 グループ分類と作品構成

分析結果を基に、家庭内コミュニケーション問題の現れ方を8つのグループに分類し、日中比較のポスターとして制作する。成果物は以下の構成とする。8グループ × 日中2枚 = 合計16枚
各ポスターには「データ根拠（番号・%）」を明記し、表現の恣意性を避け、根拠を持った視覚化を行う。

Group1：距離・沈黙（言葉になる前に止まる）

同じ空間にいながら深い対話が成立せず、感情が言語化されないまま止まってしまう状態を扱う。会話は存在していても核心的な話題が避けられ、沈黙や距離として関係に残る構造である。

Group2：怒りの扱われ方（温度差）

怒りが衝突として現れるのではなく、親子で温度差を生み、理解されないまま別の形に変換される状況を扱う。怒りは対話の起点になり得る一方で、否定や抑圧によって回避・沈黙へと移行しやすい。

Group3：悲しみの行き先（内側に落ちる／外へ逃げる）

悲しみが家庭で受容されない場合、相談できずに内面化し、沈殿するように残る傾向がある。逆に外部（友人やネット）へ逃げる形で処理されることもあり、家庭内の共有不足が問題構造として現れる。

Group4：不安と相談行動（頼る／黙る）

不安や悩みが生じた際に、親へ相談できるか否かが大きな分岐となる。相談できない場合、家庭が安全基地として機能しにくくなり、感情は孤立化する。

Group5：冗談という変換装置（本音を包む）

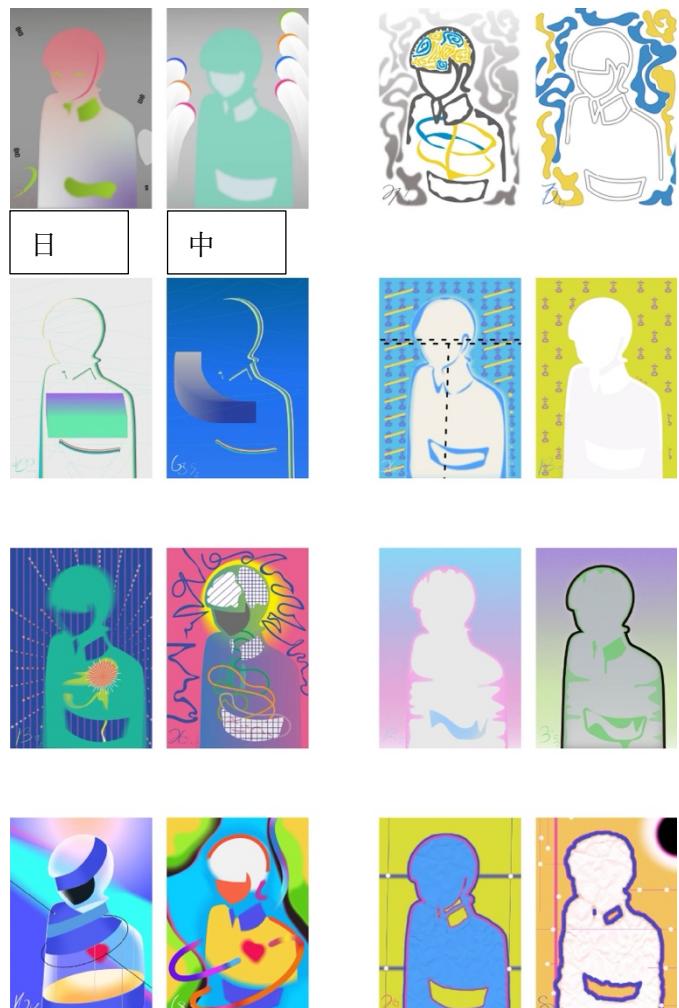
本音がそのまま言葉にならず、冗談や軽口という形式に変換されて表現される構造を扱う。表面的には明るく見えるが、核心の感情が伝達されず、問題が残留する場合がある。

Group6：スマホという逃げ道（接続と遮断）

スマホは外部と繋がるツールである一方、家庭内コミュニケーションから離脱する装置にもなる。同室でも心理的には別空間に移行する状態は、現代的なコミュニケーション課題として重要である。

Group7：「分かっている」という誤差（理解のズレ）

親は「分かっているつもり」でも、子どもは「理解されていない」と感じる。理解の錯覚や解釈の違いによって、対話が成立しているようで成立していない状態が生まれる。



Group8：言葉にならない感情の最終形（残留）

抑制や変換の結果、言葉にならなかった感情が家庭内に残留し、距離や沈黙として蓄積する状態を扱う。最終的に関係の質に影響を与える構造として位置づける。

6. ポスター表現の意義

本研究の制作では、統計結果をそのままグラフ化するのではなく、調査で示された傾向を「構造」や「感情の形」として読み替え、視覚的要素に変換する。これは視覚デザインが持つ翻訳能力を用い、言語情報を超えて理解を促進する試みである。

ポスター表現は一枚の画面の中で、関係の距離、温度差、ズレ、沈殿、遮断などを構造として提示できる。さらに日中比較ポスターとして並置することで、違いが一目で理解できる対照形式を作ることが可能になる。

7. 今後の課題

今後の課題として、第一に、設問番号・%とポスター要素の対応（Excel 対応表）をさらに精密化し、表現の根拠をより明確にする必要がある。第二に、情報量と余白、日中比較の見やすさなど、ポスターの可読性・展示性を高める調整も重要である。第三に、ポスターが対話促進に与える効果について、鑑賞者ヒアリング等の方法を導入し検証することが求められる。

8. おわり

本研究は、家庭内コミュニケーション問題を心理的課題として扱うだけでなく、視覚デザインによって外部共有可能な形へ変換し、第三者理解を促す点に独自性がある。

学術的には、日中比較を通して感情表現・相談行動の差異を整理し、「言葉にならない感情」の問題構造を可視化する枠組みを提示できる。

デザイン領域においては、データ根拠を持つポスター制作という方法を通じ、社会課題を扱う表現としてのポスターの可能性を拡張する意義がある。

参考文献：

- 劉妮（リュウ・ニー）（2017）「日本と中国の家庭文化の比較を通した親のしつけの差異一両国の大学生を対象にして」『臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要』11, 61-71.
- 鈴木 祐（スズキ・ユウ）（2020）『最強のコミュ力のつくりかた』東京 KADOKAWA.
- 水本深喜（ミズモト・フカヨ）（2018）「青年期後期の子の親との関係 — 精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差 —」『教育心理学研究』66 (2), 111-126.
- 北山 忍（キタヤマ・シノブ）／マーカス, H. R. (1994) 『感情と文化—相互影響に関する実証的研究』(Emotion and Culture: Empirical Studies of Mutual Influence) ワシントン D.C. : アメリカ心理学会 (American Psychological Association).
- 陳丹（チン・タン）（2025）「婚配模式が世代間同居形態に与える影響およびコーホート差異—教育水準と一人っ子属性の視点からの分析」『中国人口科学』39 (5), 34-49.
- バルト, R. (1977) 『イメージ・ミュージック・テクスト』花輪光訳, みすず書房.
- クレス, G./ファン・リューウェン, T. (2006) 『視覚デザインの文法』ロンドン：ラウトレッジ社.